

駿府城天守台跡の石垣

駿府城の天守閣の土台は、日本で最も大きなものである。天守閣は 1635 年に焼失し、その後再建されることはなかった。現在行われている考古学的調査の結果、天守閣の基礎の一部が残っていることが判明した。天守閣は一般公開されており、16 世紀から 17 世紀にかけての石造り城郭の工法の一端を見ることができる貴重な機会となっている。

徳川家康公（1542-1616）は、若い頃、駿府（現在の静岡市）に住んでいた。1580 年代後半、彼は駿府を統一し、駿府城を築いた。家康公は、関ヶ原の戦い（1600 年）で決定的な勝利を収め、後に日本を再統一することになる。1603 年に将軍となったが、2 年後にその座を息子に譲り、駿府に隠居した。1607 年、彼は野心的な城の拡張に乗り出し、全国の大名に工事を命じた。各藩の職人が堀や水路を掘り、石垣を築いた。また、石材には各藩の紋章などが刻まれ、その多くは現在でも見ることができる。

家康公の新しい天守閣は、前の天守閣と同じ場所に再建されたが、その規模ははるかに大きくなった。今回の発掘調査では、旧天守閣と新天守閣の基礎部分や、家康公の時代以前に作られた堀の跡が発見された。石垣の積み方は時代とともに変化しており、それを基礎の違いで見ることができる。初期のものは石が削られておらず、石垣の傾斜も緩やかである。家康公の大天守に使われた石は、ぴったりとした大きさにカットされており、壁もかなり急になっている。

1635 年の大火の後、1638 年までにほとんどの城郭の再建が完了したが、天守閣は再建されることはなかった。1867 年の徳川幕府の終焉後、駿府城は新政府所有となった。1896 年、城下は陸軍に与えられ、歩兵第三十四連隊が使用した。天守閣の土台から上の部分は取り壊され、最奥の堀を埋めるために使われ、兵舎などの軍用建物を建てるための平地が作られた。1949 年、静岡市がこの跡地を買い取り、公園として整備した。2016 年から天守閣の基礎部分の発掘調査が始まった。